

地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後

佐藤 久（東京大学名誉教授）

[編集者のまえがき]

以下は第6回外邦図研究会(日本地図センター、2004年11月27日)における佐藤久先生の講演の記録(その1)である。佐藤先生は、水谷一彦氏(平凡社)の紹介により、第4回外邦図研究会(駒澤大学246会館、2003年11月8日)に出席いただいて以後、第5回研究会(お茶の水女子大学文教育学部1号館711室、2004年6月19日)にも出席くださり、たびたび貴重なコメントをいただいていた。終戦前後に東京大学の大学院生として教室外の各種の活動に参加され、地理学界だけでなく陸地測量部についてもご存知のことが多い。こうした先生の体験を中心にこの時期の事情をお聞かせいただけないかとお願いしたところ、引きうけてくださり、この講演が実現することとなった。

先生の講演は大きくわけて、東亜研究所での地図関係の調査業務(1941-1942年)、ニューギニア調査(1943年)、陸地測量部での写真判読作業(1944年)、

兵要地理調査研究会の会合および関連した資料作製活動(1945年)、終戦直前に予想されていた米軍上陸にそなえての調査活動(1945年)、終戦前後の陸地測量部における資料焼却(1945年)、終戦後の写真測量学会(第1次)、講演をめぐる質問と応答、にわけられ、きわめて内容豊富である。また貴重な戦前の地図、空中写真の現物を紹介されながらの発表であった。

そのため、講演記録として一度に原稿をまとめるのは容易ではなく、佐藤先生にご相談の上、複数回にわけて印刷に付すことにした。また、一部は前後を入れ替え、参考的事項、注記などの補正・追加(おもに脚注部分。戦前の勤務先は日本地理学会会員名簿などによる[昭和16・17年12月現在のものを使用])も加えていただいた。今回掲載するのは、上記の および である。なお、上記以降では、多数の地図や空中写真が紹介されるが、この掲載等については今後の課題とさせていただきます。

はじめに

[本文は、録音テープからの起稿・編集であるが、補修的語句や冗長煩瑣な挿入句などは註にして文末に移した。理解を助ける目的で補った註記もある。また、先輩諸先生の生没年・役職等には出来るだけの正確さを期したが、万一の誤りがあれば御寛恕を戴きたい。]

私が大学(東京帝国大学理学部地理学科)に入りましたのは昭和16年、西暦1941年で、六十何年かの昔になります。小学4年生ぐらいの時だったでしょうか、地理の授業で、廃藩置県という、その時点からは約70年前、随分の大昔で、化石にでもなったような時代の話、と、聞いたことがありました。今振り返ってみれば、終戦もはや60年になんなんとする大昔で、「戦争を知らない子供たち」がもう定年。もっとお若い方は、おそらく中学生代位の話、と感じていらっしゃると思いますが、当時を体験した人間の残り少ない一人として、その前後のあれこれを、できるだけお伝えして置きたい、と思います。

東亜研究所での手伝い

大学に入って間もない頃に、田邊健一・伊藤隆吉などの先輩¹からの、ちょっとお「手伝い」に来ないか、という話があり、級友二三名で東亜研究所へ時々行くことになりました。勤務時間は別に決まっておらず、手の空いたときに来ればよい、という形です。今で云えばアルバイトですが、その頃のアルバイトという言葉は、学生にとっては論文、特にドクター論文を書くような仕事を指していて、また一般の人々には、無償で働く「勤労奉仕」を意味していました。日中戦争が始まって以来、男性ばかりでなく馬やトラックまで徴発され、国内の労働力不足が激しくなっていましたから、ナチス=ドイツ流のアルバイトディーンスト[Arbeitdienst]を翻訳したそういう名目で、学生その他を工場や農場へ駆り出した訳で

¹ 当時、企画院に^{すがい}西水孜郎(1904-85)・田邊健一(1917-85)東亜研究所には発足時に尾原信彦(19xx-95)・西田正夫(1909?-48?)、のち伊藤隆吉(1914?-86、成蹊高校兼任)・上野福男(1909-2000)などの地理学者が奉職していた。

す。

東亜研究所は、昭和 13(1938)年の 9 月にできた研究所です。はっきりと調べたことはございませんが、前年の昭和 12(1937)年の 10 月に生まれた企画院というお役所の外郭団体、だったのではないかと思います。太平洋地域関連の統計書とか文献類を集め、それを翻訳して出版するのが、メインな仕事だったようで、そういう資料が、官庁や民間の研究所、あるいは図書館や大学も含めて、何処にどんなものがあるか、何処に行けば借り出せるか、というようなことを調べるのが、我々の仕事でした。この「手伝い」仕事の依頼は在京の各大学に来ておりまして、全体では 20 人前後もの学生がいたようです。関西・九州とか地方の図書館・研究所には、所員が出張するか、各地それぞれにアルバイトを募るかをしたのでしょう。

この仕事が大体一段落した秋頃からだと思います。今度は、東亜地域の、当時の言葉で云えば大東亜圏の、いろんな種類の地図を調査すると云うことになりました。何処にどんな地図がどれだけあるかをリストアップする仕事に変わった訳です。これが纏まったのが昭和 16 年度の末頃です。完成した目録は、それらの地図類を所有する各機関へも寄贈しましたが、私のところにもガリ刷りの目録が残ってありました。これはどうも、校正チェック用に配られたものではなかったかナ、という気が致しますが、外邦図研究用に小林先生を通じて大阪大学に寄贈致しました(東亜研究所資料課編『南方地域地図目録』1942 年 7 月刊)。実際に配布された完成版は、活版刷りでかなり立派な表紙の付いた冊子です。今では、戦前の役所も会社もほとんどが無くなったり、他の名義に変わったりしておりますので、リストにある中で現在も使えそうな地図は、大学所蔵のものぐらいでしょうか。それらも図のスケールが一般に小さくて、何十万分の 1、或いは何百万分の 1 という小縮尺図が大部分でしたから、野外の調査などの役には立たないのではないか、という感じがいたします。また、多少ながら個人の所有物も入っていましたが、所有者の多くも故人になられています。

東亜研究所での見聞

東亜研究所で面白かったのは、作業室の壁に大きな大東亜地域、つまり東南アジアの白地図が貼ってござ

いまして、これに「何月何日」と日付の入った日本軍の前線が赤い線で書き込まれていて、それがだんだん先へ行く訳ですね。純真無学な学生としては、それが非常に嬉しいんです。線がいつまでも動かないような時には、いったいどうなっちゃったんだろう、と心配したものでした。

また此処には、実は大本営の陸軍部と海軍部、つまり参謀本部(陸軍)と軍令部(海軍)から派遣された人たちもおりまして、雑談の折に時々、中には意図的に、わざと流しているのではないかな、と思われるようなものもありましたが、今で云えばマル秘の情報が聞こえても来ました。マル秘雑談の中で未だに記憶に残っているのは、大東亜戦後の、占領地域をどう処理するか、という話でございます。

順不同で申し上げますと、まずは南部アジアのインド。当時のイギリス領印度(インド半島とセイロン島)に加えて英領ビルマ²、今のミャンマーまでを含みます。ここには、ネール(戦後はネルーと発音するのが一般的)と云う名家がありまして、独立後の初代首相になったジャワハルラル・ネルー(1889-1964 年)や、そのお嬢さんで、やはり首相になって、後に暗殺されるインディラ・ガンディー(1917-1984 年)の出た家でございます。それに対してチャンドラ・ボース(1897-1945 年)。思想的にネールとは別の立場で対立的だったんですが、海外に、日本にも亡命したりして、独立運動の一つの中心になっていた人でした。この二人を仲介して和解させ、彼らを中心とする政府を作らせて独立させる、という計画でした。独立とは云っても当時の日本が意図したのは、満州帝国のような傀儡政権を作ろう、ということであったのかも知れません。

次に和蘭領東印度。現在のインドネシア共和国と呼ばれる地域ですが、ここは、島がたくさんあって面積的にもかなり広い。この中で、ジャワ島およびその東の小スンダ列島は、人口密度が非常に高く、宗教的にもまわりと違ってイスラム教徒が多い。直接統治は大変で、日本の手に負えそうにもないから、これも避けよう。つまり蘭印は、人口密度の小さいところ[スマトラ・ボルネオ(カリマンタン)・ニューギニア(イリアン)など]だけを取ろう。ジャワ島ほかの中心部は独立国家に、と。

一方フィリピンは、19 世紀末の米西戦争でスペインか

² 1937 年に印度から分離(なお英領)。

らアメリカが奪い取った土地ですが、独立(1935年)後も米軍の軍港や空軍基地があり、軍事的にはアメリカ領土に変わらず、何よりも、長い統治のもとで思想的・文化的にアメリカナイズされている。そこで、住民の「皇化」が十分に進むまで ということは、要するに半永久的に 日本が直轄統治する必要がある。

さらにシンガポール。ここは英領マレー半島の突先にある小島ですが、地政学的に非常に大切な場所である。当時は、日本でも地政学が大流行³していました。特に「皇国地政学」。皇国の地政学というのを、京都帝大の先生⁴がたいへん強調されまして、皆さんがそれに傾倒した時期でございます。そういう重要な場所であるから、ここは、絶対・永久に日本が確保する、しなければならぬ。そこで、地名も「昭南島」と改めることになりました。

こうした改名はあちらこちらで行われ、語呂合わせのような漢字への置き換えもありました。例えば、蘭領東印度のセレベス(スラウェシ)島の南西端に、マカッサル⁵という港市がございます。日本人移民が結構多かったところですが、これを三笠 日本海海戦時の戦艦三笠、元は三笠山ですが その三笠に改名する、ということもありました。

東のニューギニアやソロモン諸島については、人口密度も低いし文化度も低い。要するに「野蛮人」しか住んでいないところだ、として、日本人移民をどんどん送り込んで開発しよう、の計画。文字通りの植民地ですね。そこで、このニューギニアも、南のヤマトの国、「南大和」と改名しようとして…。しよう、ではなくて、「昭南・三笠」と共に政府が新聞発表までもしたのです。

残るのは、当時の仏領インドシナ、今のベトナム・カンボジア・ラオスの 3 国ですが、これとその他の細々した

ところ(英領のマレー半島やボルネオ島北半、ポルトガル領チモールなど)は、なるべく近い将来に独立させるけれど、少なくとも鉱産資源の開発は日本が中心になって行ふ必要がある。と言うのも、いろんな鉱産物、特に石油資源、蘭印(和蘭領東印度)のスマトラ島や英領ボルネオ北海岸の油田などがありますから。

昭和 15(1940)年に(仏印進駐で実質的に)戦争を始め、すぐに軍がしたことは、日本石油会社、戦争中は帝国石油と社名が変わっていましたが、その採油技術者を総動員することで、彼らを兵隊と一緒に送り込んでの油の確保です。(翌年)12月8日の宣戦布告に至ったそもそもは、満州や中国で勝手なことをやっている日本を懲らしめるには、油の供給を絶つのが一番だろう、という訳でアメリカが対日輸出禁止を決めた(1939年7月、日米通商条約の一方的破棄を通告)、そのことが原因だ、と言われますが、とにかく、戦時にも平時にも石油が一番大事!⁶、というお話です。

近年、海南島の南方の小さな珊瑚礁の島々について、中国とフィリピン、あるいはベトナムが領土争いをしています。中国名は南沙諸島ですが、日本では当時、確か「新南群島」と名付けたんじゃないかと思いません。そういうところも、海底油田があるかも知れないので確保して置く必要がある、と書いていました。

そのほか、タイ⁷は、(山田長政の渡航する)江戸時代よりも前から日本人が行っており、(戦前は)王様も訪日したりして、大変に交友関係のよろしい国です。フランス領とイギリス領に挟まれた緩衝国として独立を保ってきた、保てて来たということ、日本の協力者、と位置付けていました。

こういう構想は、いったい何処で考え出して、何処で承認されたものなのか。一向に判らないのですけれど、翌昭和 17(1942)年の 11 月に「大東亜省」が設置されたところからみると、やはり、軍部だけではなくて文官も加

³ その頃の書店には、ナチスの精神的指導者とも云われたハウスホーファー(Haus-hofer, K.E.N.1869-1946、ベルリン大学の地理学教授で、陸軍大将の地位にも任じられた)の『地政学(ゲオポリティーク)』が、ヒトラーの『我が闘争(マインカンフ)』や東条英機首相の伝記などと並んでいた。

⁴ 史学科地理学教室の小牧實繁教授(1898-1990)。神職の出自で、著作では甚だ舌鋒鋭く、手当たり次第に切り捲る闘士の印象であったが、それは影絵。実像は礼儀正しい紳士で、講演会場では背筋を伸ばして音吐朗々と話され、また、ほとんど身じろぎもせずに聴講されていた。戦後、教職追放の憂目に遭われたが、やがて滋賀大学教授に復職、学長も務められた。

⁵ モルッカ[マルク]地方が香料諸島と呼ばれた頃からの東西貿易の中心地。今はウジュンパンダンと改名され、マカッサルの名はカリマンタンとの間の海峡のみに残る。

⁶ しょうこんゆ
松根油から航空燃料や重油の代用品が得られるため、勤労奉仕・勤労働員の学生生徒も加わって、各地で松の伐採と根掘りが行われた。戦後の拡幅で失われたと思われがちな旧街道沿いの松並木なども、多くは戦中に姿を消している。また、潤滑油の補いに「ひまし油」が増産され、民家にもヒマ(蓖麻・トウゴマ)の栽培が奨励された。ガソリン代りに木炭の乾留ガスで走る「木炭(後には薪)自動車」が一般的となり、戦争末期には燃料不足で動けない艦艇さえも増加していた。

⁷ 1939年に不平等条約の改正に成功し、国名もシャム(暹羅)からタイに変更。日本と攻守同盟を結んでいて、第二次大戦では昭和 17(1942)年に米英に宣戦布告もした。

わって協議した結果、或いはその途中の叩き台みたいなもの、だったのではないかと、思っております。振り返ってみますと、東亜研究所でアルバイトをして、何が一番の収穫かと云えば、この「夢物語」を聞いたことかも知れません。これが、昭和16年から17年の5月か6月頃までの経過です。

海外調査、とくに田山・多田両先生と陸海軍

昭和17年の夏が過ぎた頃、地理学教室に、田山利三郎という東北帝大の先生が見えられました。辻村太郎(1890-1983、当時、東京帝国大学助教授)先生と面談されての用件は、ニューギニアに調査団を派遣するについての協力要請でしたが、これに関しては、後でお話し申し上げます。この方は地質学教室の助教授ですが、当時、いっぱい肩書がありまして、海軍省水路部嘱託、南洋庁嘱託、それに、南洋庁がパラオの島に作った熱帯産業研究所の嘱託も兼ねておられ、大学での講義はほとんどなくて、専ら珊瑚礁の調査をされていました。そして、東北帝大理学部の記事などに、第三紀珊瑚石灰岩や新しい珊瑚礁の地形・地質の論文をたくさんお書きになり、日本地理学会の会員にもなっておられました⁸。なお、お齡を召した方はご記憶と思いますが、戦後、昭和27(1952)年9月に、青ヶ島の南方で明神礁という海底火山が噴火しました。田山先生は当時、海上保安庁水路部測量課長(東北大学教授を兼任)で、調査船の第五海洋丸を指揮してその調査に行かれましたが、たまたま火山活動が静かだったので、もっと近付けられるだろうと船を進めたとたんに大きな海底爆発が起き、船もろとも全員31名が亡くなりました。そう推測するしかない、劇的な最後を遂げられたのでした。

ちょっと横道に入りますが、戦後間もなく、人文系の各種学会が一緒になって、互いに議論し合いながら研究や現地調査をしようではないか、という機運が高まりました。そしてその試み、野外総合調査の最初のものとして、昭和25・26(1950・51)年に「八学会連合」の対馬調査⁹が行われ、その初年度には田山先生も参加されま

した。私は、助手のような格好でその後ろにくっついて、半月ほど対馬を歩き回ったのですが、期待したニューギニア調査の裏話などは、あまり話されませんでした。共同調査の対象に対馬が選ばれたのは、その歴史・民俗的な、また地理・地政学的に特異な位置と性格が重視されたものです。この八学会連合は、その後「九学会連合¹⁰」になり、能登半島とか、返還された直後の奄美諸島、あとでは佐渡や下北半島なども調査しました。言わば辺地の総合・共同調査をさかんに実施したグループでございます。

違った学問分野の人々が一緒に野外調査をする、という構想は戦前からあったもので、とくに、占領地として新しく視野に入ってきた中国大陸を対象に、各種の海外調査が行われていました。地理関係の例をちょっと挙げますと、昭和8(1933)年の熱河学術調査。これは第一次の満蒙調査で、隊長は多田文男先生(1900-78年、当時、東京帝大助教授)。次は昭和13(1938)年の蒙疆学術調査。人文・社会系を含む京城帝大メンバーが主体でしたが、団長はやはり多田先生。翌39年には、東亜研究所が中心になっての北支・蒙疆のレス(黄土)に関する学術調査です。当時日本地理学会の会員でもあった地質の徳永重康氏が団長で、多田先生は副団長。地理は上田信三(1913-44?)・保柳睦美(1905-87年)・矢沢大二(1913-94年)の東大卒業生ら¹¹が参加していま

日)に朝鮮戦争が勃発したこともあって事務量が多く、参加者は木内信蔵・河野通博・小堀巖・佐藤久・関口武・田山利三郎・前川文夫・山階芳正と、学生の大原久和・矢橋謙一郎の計10名[日本文科学会編『人文』1-1、有斐閣、1951]で、日本人類学会に次ぐ多数であった。地理学評論日本地理学会75年史特集号(2000年4月)には、調査員に織田武雄・西川治・藤岡謙二郎3氏の名も見えるが、これは科研費申請段階のものとして推測される。また前川氏は植物分類学者で東大助教授。強い希望により一時的に地理学会員となって参加したもので、同様な一時在籍会員は他の学会にも存在したが、建築学会員某氏のように、共同調査員を装って迷惑をかける不心得者も介在した。なお、当時は韓日間の密輸が盛んで、対馬浅茅湾には保安庁釧路海上保安部の警戒・取締用舟艇が多数駐在しており、田山会員の筋で、連絡・交通などに便宜供与を受けることが出来た。

¹⁰ 昭和22(1947)年に日本言語学会・民間伝承の会・日本民族学協会・日本社会学会・日本人類学会・日本考古学会の「六学会連合」として発足。翌年、日本地理学会・日本宗教学会が加盟して「八学会連合」となり、年交替の当番学会制で運営し、共同課題の研究発表を行う春の連合大会と特定地域での夏季の共同調査(昭和25年以降)に、学会連合体としての特徴を發揮していた。昭和26(1951)年に日本心理学会を加えて「九学会連合」となり、以後は加盟学会の増加による改名を廃止。平成2(1990)年に、役割を終えたとして解散した。

¹¹ 当時、それぞれ、東亜同文書院(上海にあった専門学校で、

⁸ 昭和27年秋に、これらの業績が評価されて日本地理学会賞の受賞候補に推され、翌年春の地理学会総会で授賞。

⁹ 八学会連合初経験の野外共同調査は、前年度が日本宗教学会、当年度は日本地理学会が当番学会で、文部省科学研究費・長崎県補助金・対馬町村連合会寄付金などを運営費に充て、また米穀の特配を受けて民家宿泊の便を計らった。直前(6月25

す。保柳・矢沢の両氏は後の都立大学教授ですが、保柳さんは一時地理調査所に籍を置かれ、文部省にも在籍されました。

次は、内蒙古の渾善達克^{くんしゃんたく}沙漠の調査。1940と41年です。これは興亜院が主体で、地理では多田・保柳先生が参加。そして最後は42年。資源科学諸学会聯盟¹²、興亜院及び北支派遣軍が中心になった第一次山西省学術調査(戦局悪化で第二次以降は実施不能)でした。参加地理学者は、多田先生(資源科学研究所々員兼務)、副団長に渡辺(光^{あきら} 1904-84年 当時は陸軍予科士官学校教授で資源科学研究所嘱託)先生。それに、花井(重次 1900-xx年 同東京高師教授)先生、陸水学の吉村(信吉 1907-47年 同陸軍予科士官学校教授)さん、人文地理の木内(信蔵 1910-93年)さんと新井(浩 1911?-xx年 同陸軍予科士官学校教授)さん、浅井(辰郎 1914- 同満州帝国建国大学教官。元お茶の水大学教授、日本地理学会名誉会員)さん¹³に 和田憲夫(19xx-50?年 同北支開発調査局)氏という方々。

これらの調査には全部、多田先生が団長または副団長なので、陸軍と多田先生との関係がいかに強かったか、を示してもいます。これは当然、1945年の終戦直前の、参謀本部からの外邦図の持ち出しにも繋がるものでしょう。

ニューギニア調査団とその初期計画

昭和13年頃だったでしょうか(正しくは15年1~5月)。林学博士で植物分類学者の金平亮三^{かねひら}(1882-1948年、元九州帝国大学教授)とおっしゃる方が、蘭領ニューギニアへ植物採集にお出掛けになって、後に『ニューギニア探検』¹⁴という本を出しておられます。田山先生は、

同年、大学に昇格。源は明治32年にまで溯る。)・東京府立高校・陸軍気象部に勤務。

¹² 1941年1月、文部省内に設置。同年12月「資源科学研究所」の官制を公布し、翌年興亜院と共同実施予定の「山西省学術調査」の隊員(本文に既出)を選考。1942年11月、資源科学研究所を開所して解散。なお、資源科学研究所(初代所長は植物の柴田桂太博士。地理部門には多田文男・小笠原義勝(1915?-64)・坂啓道(1918-)氏が所属。庁舎は当初、青山高樹町にあり、本館は明治調の洋館で、広い庭園と倉庫が付属していた。昭和20年5?月の空襲で付近一帯と共に焼失)。

¹³ 訂正。会場では浅井治平(1891-1974 立正大学教授。辰郎氏の尊父)先生と発言したが、それは、大学で多田先生と同期であるところからの、演者の錯覚であった。

¹⁴ 養賢堂、1942年1月発行、346頁。内容は植物・動物・住民・産業・探検史など多岐詳細にわたる。日本出版文化協会の推薦

この金平氏に助手として同行されていました。

一方、さっき話に出た資源科学諸学会聯盟、これは当時、文部省内の組織で、後の資源科学研究所の母胎にもなったものですが、ここで金平探検記が話題となり、面白そうじゃないか、植物だけでなく他の分野も一緒になって調査をしてはどうか、と話が具体化の方向に進みました。そして、傘下の諸学会に諮問¹⁵をしたりして、探検の具体案についての検討も進んだのでした。ところが対米戦争が始まり、日本の占領地にはなったものゝ勝手に行けるところではない。すべて、軍のバックアップを得なければならない。そこで、はじめは陸軍に話を持ちかけたようなのですが、その時には既に、陸軍はオランダ領からオーストラリア委任統治領 -今のパプアニューギニアや、さらにその東(ソロモン諸島)の方に行ってしまう。後方は、オランダ領は海軍に任せて。海軍はそこに民政府、ニューギニア民政府を作って統治する、と、どんどん現実の方が先に進んでしまっていて……。そこで諸学会聯盟がどう動いたか、そこまで詳しくは判りませんが、話は当然、海軍の方に行きました。最初は、学者先生が中心になり、それを軍が守って、という構想でしたが、それがすっかり引っ繰り返りまして、民政府の中に調査局を作り、そこに付随する調査隊と云う形で実施しよう、となったのです。

そこで、海軍省ニューギニア民政府の中に、「調査局」¹⁶と、その下部組織としての「ニューギニア調査隊」¹⁷が編成され、調査隊長には、ニューギニア(以下、適

図書となり、半年後に1000部を訂正再版するほど好評であった。

¹⁵ 1941年2月、資源科学諸学会聯盟地理部会(日本地理学会・日本陸水学会・京都探検地理学会で組織)が、ニューギニア探検に関する同聯盟会長からの諮問(希望する調査項目・期間・地域・経費その他)に答申[日本地理学会75年史]。同様の諮問は、地理以外の諸部会に対しても行われた。

¹⁶ 調査局には、調査隊の他に、某落選代議士の暗躍で、彼の率いる建設労務者数十名からなる「設営隊」があった。当初は、各調査班に設営班として分散付随し、調査用の宿営施設を作るのが任務、と聞いていたが、そのようなことは全く無く、最後までマヌクワリの宿舎で徒食し、徴兵逃れが狙いで参加か?とも疑われた。

¹⁷ 軍では「調査隊」と呼んだが、「隊員」は「調査団」とも自称した。なお、田山氏の上司で恩師でもある矢部長克東北帝大教授(1878-1969)が顧問に就かれ、マヌクワリにも一度、視察・激励に見えられた。国立大学の古参教授は当時、大臣や軍の将官と同じ勅任官待遇で、矢部教授の乗船には中将旗が翻っており、海軍中將に昇進したばかりの民政府総監も埠頭までお出迎えの礼

宜N.G.と略称)探検の経験があり、水路部囑託として以前からの関係も深い田山先生、その補佐役として、京城帝大の、当時学生主事補の民俗学者泉靖一(1915-70年、戦後は明治大学、東京大学教授)氏が任命されました。隊の構成も、諸科学連盟当時の夢よりも飛躍的に大きくなり、第一から第八までの八つの班¹⁸を作り、東北帝大・資源科学研究所・東京科学博物館・京都帝大・南洋庁・南洋興発会社、それに水産研究所と電源開発株式会社に振り当て、調査員を集める、という話になりました。水産研と電発は後から追加されたもののようで、別組織だった可能性もあります。

調査団の実現段階では、京大の先生らは参加せず、京城帝大と九州帝大の一部¹⁹が加わりました。民政府構想では、各班には地質・鉱物(鉱床)・林業・農業・医療 隊員のお医者さん役、兼、人類学 及びルートマップを作る測量、並びに設営の各班、とは、班の中の班が設けられ、医療までのそれぞれには奏任官待遇の、だいたい大学の助手や若手助教授クラスの調査員を置き、調査員には判任官待遇の助手を付ける、とのこと。助手は理系の大学生または院生クラスで、文系のそれらは、連絡員という肩書です。その結果、総計で奏任73名、判任291名、その他59名という、非常に大員数になりました。これに加えて、護衛あるいは通信(無電)連絡のため、各班に2名以上の水兵を付ける。交通機関としては、機帆船²⁰を2隻、ダイバーボート²¹2隻、武装 機関銃が付いた程度ですが、大発²²が10隻。

をとった。兎戯に類するが、調査団の若造としては 胸の空く快事であった。

¹⁸ 後記の『西イリアン記』によれば、調査隊は後2者を除く六班構成で終始している。

¹⁹ 現職とは限らず、広島医大・鳥取高等農林・岐阜高農その他、他校在籍の卒業生も含まれる。

²⁰ 焼玉エンジンを搭載した200~250トンほどの帆船。無風の時はエンジンで走るが、風があれば帆走して燃料を節約出来る。おもに関西~上海などを往復して物資輸送に当たっていた。200人以上もの乗船が可能。

²¹ 天然真珠を採るダイバー(潜水夫)が乗る20~30トン程度の小型機帆船。白蝶貝・黒蝶貝などの「真珠貝」は、貝殻も貝ボタンなどに加工・利用された。戦前は、委任統治 領のパラオ・トラックなどの島々やオーストラリアのダーウィン・ケアンズなどの港を基地として、アラフラ海で活躍した。20~30人ほどの人員を運べるので、制空・制海権を奪われたソロモン海域での撤収作戦にも転用された。

²² 大型発動機付舟艇の略。鉄製平底の上陸用ボートで、搭載した戦車が自力で上陸出来るように、舳先が方形で前方に開き倒せるようになっていた。

その他にゴムボート12、トラック10台等を準備して、2月から9月の間に1ヵ月あるいは1ヵ月半の調査を3~4回行う、というまことに壮大な計画。

以上の数字は、すべて調査局長ほか担当者の説明に従うもので、第三班々長の植物分類学者、佐竹義輔(1902-xx年、当時は東京科学博物館学芸官)氏が1963年に出版された『西イリアン記』²³の中に、克明に記録されています。

以上のほかに、いちいちリストアップしきれない程の各種資材と食糧、写真フィルムや調査用消耗品はもとより、オランダから押収した地形図の複製や日本軍撮影の空中写真も供与される、手筈になっていました。その当時(戦前)、オランダの「蘭領N.G.石油会社」と「蘭領東印度航空会社」が協力して、空中写真を撮影し写真から地質図を作る、という作業を実施していました。その基図には、すでに五万分一ないし十万分一の地形図も完成して……。そんな話を大衆科学雑誌²⁴で見っていましたから、その成果品でも使えれば有り難い、と思ったものです。然し、後年、私が陸地測量部で仕事をするようになってから(後述)知ったことですが、このオランダの作業も、主要地域を局部的に図化した程度のものでした。地形図も、部分的には十万分一図も出てきましたけれど、あとは二百五十万分一ぐらいのもので、これでは、実際に山道なんかを歩くには使えません。そんな縮尺はともかく、結果的に地図はもちろん空約束。空中写真を貸与!の方は、かなりの可能性があったと思うのですが、これも実現はしませんでした。

ニューギニア調査隊の現実

いま述べたような膨大な計画は、実際の調査隊結成時には著しく縮小されており、隊員総数も約250名と、予定の半分くらいになっていました。現地ではそれで

²³ 1963年、廣川書店発行。索引等を除き342頁。表題の西イリアンは、インドネシア独立後の改名によるもので、副題は「ニューギニアの自然と生活」。約3分1が調査に至るまでの経緯その他で、異邦調査団企画運営の参考にもなる。

²⁴ 例えば科学知識普及会発行の「科学知識」。手元に残る同誌21巻11号には、上床国夫(鉱床学、東大工学部教授)・東亜共栄圏の石油資源、木本氏房(大日本航空株式会社航測所長、陸軍大佐)・航空写真測量と其の使命、などの記事があるが、後者に付随する筈(目次と本文表題には残る)であった「照魔鏡のやうな航空写真」という口絵写真は、指示または自肅でカットされている。対米開戦前(昭和16年11月)ながら、すでにそのような時勢であった。

も、そんなにもいたのかな、と思うほど少数になった印象(実員は170名前後?)でした。予告された交通手段も、もちろん皆無。陸上は徒歩、海上では、民政府所有の僅か2隻のダイバーボートを融通し合って使わせて貰う、という状態でした。

何故そんなに縮んでしまったかと申しますと、調査計画が実施に移された昭和18(1943)年の初頭には、すでに、グダダルカナル島(ガダルカナル、略してガ島または飢島)をめぐるソロモン諸島(英保護領)での攻防戦が、日本軍の敗退で終わりを迎えていた時期、より正確に云えば、陸軍部隊の「転進(退却の言い繕い)作戦」の最中、だったのでした。すでに、大規模な資源調査などを実施出来る状態ではなくなっていたのです²⁵。

調査団並びに民政府要員は、1月13日に横浜を出港。パラオ寄港の後、2月5日に西ニューギニアの首都マヌクワリに入港しました²⁶が、大本営による「ガダルカ

²⁵ 日本軍は、米豪の連絡路を遮断する意図で、ポートモレスビー攻略を図る一方、前年7月にグダダルカナル島を占領し、僅かに平地の開けた首都ホニアラに飛行場を建設したが、ミッドウェー攻略作戦の失敗による航空戦力の劣勢化もあって同8月以降の同島争奪戦に敗れ、パプア=ソロモン海域からの全面撤退をも余儀なくされた。国民には知らされなかったもの、田山先生が大学や研究機関を巡って参加を勧誘された秋頃には、すでにこの状態に陥っていた。軍による大調査団の企画・強行も、或いは一種の「謀略」であったのかもしれない。

なお、当日多弁した昭和17年4月18日のB25陸上爆撃機による本土初空襲、それに誘発されたミッドウェー島攻略戦の大敗、ソロモン海戦始末談義などは、戦後多数公表された戦記類に譲り、以下には、談話では省略した調査団事情などの二三を述べたい。

²⁶ 日本郵船の白山丸、約1万屯近い石炭焚き蒸気貨客船で乗船者2千余名。東ニューギニアとの境界線に近いホーランドシア(現、ジャヤプラ)へ行くと云う第八建設隊の妙高丸(千屯級ディーゼル高速貨物船)と船団を組み、黒煙と低速とで恨みを買った。委任官待遇以上の男性と女子挺身隊で志願?のタイピスト・看護婦の数がキャビン、以下は「蚕棚」に収容された。蚕棚とは、腰をかがめてやっと通れるほどの高さで船倉を数段に仕切った寝食用の床で、第二(資源研)班の助手3名は、調査員3名の船室に割り込み、夜は各ベッド(1個は仮設)の下で過した。招かれざる客、また「軍律違反」である。以下はマヌクワリ(マノクワリ)着後の日記。当日、荷物運搬の使役で「…民政府・調査局・調査隊・軍ら相互間の連絡頗る悪く、命令系統又乱雑にして要領を得ず。数時間を興発棧橋にて無為に過し、漸く調査隊関係の荷物を宿舍まで運搬するを得。…」。

10日の日記:「…家郷を出て^{ちようど}丁度満一ヶ月である。…修正に改訂を加えた調査試案が本部から出され、地質鉱床班で検討していた様子であるが、…やはり時期尚早である。調査隊の存在の薄きとその価値の低きとは、全く予想の外にして、種々の問題、不平、意見の齟齬等の生ずるは、田山先生の責任と云はんよりは寧ろ民政府関係連中の無理解と、加ふるに人手不足、材料欠乏、食糧・船舶の不如意等と、開府早々の多忙とに依るものであ

ナル島とラエ²⁷から転進」の発表は、その僅か5日後のことでした。戦況の内情は調査員にも説明されなかった判任官待遇以下は全く蚊帳の外 ようで、パラオでも、上陸後も、調査団本部では連日連夜の会議続き。話が違うじゃないか! 軍の言いなりになり過ぎる! 班の編成も調査計画もクルクル変わる! 装備も不足だ! etc.で、調査局長(海軍主計大佐)と調査隊員との間で、田山隊長と泉補佐役は大変な苦勞をされたようです。

その間、私たち判任官待遇以下の軍属は何をしていたか、と云うと、食事当番に加えて、はじめの五日間ほどは沖仲仕補助の使役²⁸。デリック(マストに付属するクレーン)で船倉から^{はしり}へ食糧・資材入り木箱を移す作業です。何箱も大きな網で吊り上げて。本職からは、結構なことも教わりました。頑丈な木箱も、角を舐に軽くぶち当てる、それだけで簡単に壊れるんです。勿論、本船と舢舨とでの阿吽の呼吸。知らぬ間に、缶詰やなんかポケットに引っ越していて! 学生らは自分では取らない。仲間に恵むんです。私も熱心に加担しました。駆り出された若手隊員は、これも当然の報酬! との認識で…。使役を免れ、分け前だけに与かっていた調査員諸先生も、たぶん同罪でしょう。

荷揚げが終わると、埠頭横の南洋興発倉庫から調査隊宿舍までの荷運びです。床に敷くアンペラ(筵)や大きな蚊帳、毛布など、取り敢えずの品々は到着直後に宿舍へ運び込まれてあったのですが、私物を入れた木

って、結局するところ、…學術調査隊なる組織(組成の意)が早きに過ぎたため…現在の如き情勢下にかかる大規模な調査団を組織したことに根本的な誤がある…。昼、榊原氏が大本営発表をもたらす。…」

²⁷ ニューブリテン島の対岸に当たるパプアニューギニアの港市。陸軍によるオーエンスタンレー山脈越え、ポートモレスビー攻略戦(大敗)の重要基地になっていた。

²⁸ ムスケルアルパイト(筋肉労働)の下命は航行中からのことで、炊事当番は当然としても、意味不明な丸太運びなどもさせられた。我々が何でこんなことを! と怒る学生もいたが、対潜見張番(2時間交替で潜水艦や魚雷を見張る)と共に船員と親しくなる機会でもあり、軍隊内の、したがって救命ボート乗船時の序列、「将校・兵卒・軍馬・軍犬・伝書鳩、付けて軍属」や、「さらばハワイよ、また来るまでは…」で始まる流行歌「南洋航路」なども教わった。その替歌「さらばバウルよ、また来る…」は、今こそ歌う人も無いが、戦争前から戦後惜昔のタケノコ生活の時期には一世を風靡した。なおバウルは、豪州委任統治領の政庁があった(後に噴火災害を避けてパプアのラエに移転)ビスマーク島北端の町で、カルデラ性の良港湾に恵まれ、ソロモン作戦を支える海空の大基地となっていたが、米・豪軍の急な西進で孤立、敵中に取り残された。

箱や調査用資材、それに、荷揚げが遅れたパイプ製折畳み個人寝台用の蚊帳や食品類、或いは酒・煙草など配給品の受領に、当番制で間欠的に駆り出されました。10台ある筈のトラックが、調査隊本部にはオート三輪1台だけで、これはほとんど、日に3度の炊飯運搬使役の専属です。そこでリヤカーと背中が専らの運搬用具となり、やっと荷出しを終えたのは、上陸から半月余りも過ぎた23日。

調査隊の宿舎は、町の中心からほぼ2軒ほど離れ、熱帯雨林に包まれた低い丘²⁹に立つコロニアル風の家屋大小2棟と、丘の中腹にあるトンガリ屋根でのっぴな建物でした。ベランダを巡らした最大の棟を隊員宿舎、その横の棟は隊長・医療班らの本部員宿舎に割り振られ、最後のトンガリ1棟には設営隊が入居。後に聞いた話では、ここはかつての陸軍慰安所で、日本軍が来るまではキリスト教会と付属幼稚園だったとか。町からこんなに離れて幼稚園とはおかしいので、施療病院だったのでは？とも思います。どっちにしてもマリア様のお家、と笑ったのは、若い異教徒の不謹慎でした。

民政府本部が置かれたマヌクワリ市街と呼べるほど大きな町でもない、そこには火炎木などが咲く南国らしい通りや並木道もあるのに、このサテライトまでの間は寂しい田舎道。ただ、道端に草合歡(オジギソウ)が咲き連なり、子供の頃のように足で薙ぎ倒すのが面白い、の程度。それでも昼は鳥の声、日が落ちるとさまざまの虫の音が集いて、2本もある蚩の木^{すだ}の、雨が降ろうとお構い無し^{すだ}の点綴イルミネーションは、驟雨後の涼しい夜道の楽しみでした。調査隊宿舎の反対側は静かな海で、細い棧橋が一本と、付属に水洗ならぬ海洗式トイレが1棟。サヨリなどの魚がよく突つきに来ていました。左にレモン島と呼ぶココ椰子の茂る低く平らな隆起

²⁹ マヌクワリが位置するドレー湾の一角は、平面図では人の右横顔のように見える。天狗の、と云うべきかも？鼻先にぶら下がるようにマンシナム島(田山氏の分類では珊瑚州島)が、鼻穴に当たる位置にマヌクワリの市街が開け、喉の位置には、後記するアンダイの村がある。額から鼻、さらに喉にかけて、湾岸一帯には2~3段の段丘が発達している。これは隆起珊瑚礁であるが、宿舎横に防空壕を掘った際には、砂礫層や粘土質な部分も見られた。オランダ語でホーヘルコップ(鳥頭)と呼ばれたイリアン北西部の半島の北岸・東岸には、これらの続きが分布している。

マヌクワリに入港する船は、マンシナム島を巡ってほぼ180度転針する。当時、米英に宣戦を布告した8日を「大詔奉戴日」と呼び、毎月、宮城遥拝などの儀式を行っていたが、N.G.民政府では、2月の大詔奉戴日に豪州(オーストラリア)を拜む、と云う珍事があった。太陽を背に、海の方角を北とした錯覚である。

珊瑚礁の小島。右手はるかに、玄武岩の古い開析火山、と調査員の何方かが解説した高さ三千米前後のアルファック山が、全山緑に包まれ、堂々と聳えていました。

調査局とのあれこれの末、調査隊は著しく変容して、隊長は局長の兼務、その下に4個の「隊」を置き、田山先生はその中の資源調査隊々長で、地質鉱物・農林畜産・水産・特別の4個「班」を指揮する、と決まりました。然し、実行動では、資源調査隊が第一~第六の班に分かれ、それぞれの班には、水産を除く3個「班」及び医務「隊」(医師6、他2の計8名)、また設営「隊」の設営・通信・連絡等の人員が参加する、と云うのですから、基本的には従来と大差なし。軍隊とは限らない？くだらない組織弄りをして、手続きばかりを煩瑣にする代物です。

先遣隊、ナビレ予察行

第一~六班の調査地域も一応の決着を見て、私の属する第二班³⁰には、アルファック山の西部を北流するブラフィ川上流地域があてられました。ところが間もなく、守備軍からの更なる要望で第三班の調査地をヤムール地峡³¹に変更する。出来れば第二班も、その北側の地域を、と、何度目かの変転。やがて2月下旬には第六(南洋興発)班が勇躍ペラウ地峡³²へ出発。第一班と第四班は3月19日にアンギ湖³³へ出発。第5班(班長、

³⁰ 基本編成は、班長 津山尚(1910-2000、植物、東京女高師講師、後、お茶の水女子大学教授)・石橋正夫(191x-47?、鉱物、資源科学研究所々員、後、北海道帝国大学教授)・野田光雄(19xx-xx、地質、満州国新京博物館学芸員、戦後は佐賀大学教授)・田中正四(1915-96? 公衆衛生学、京成帝大講師のち広島大学教授)。助手はそれぞれに、安土孝(1921-、当時東大植物園雇員)、坂啓道(1918-、駒沢大地理学・当時資源研助手)、佐藤(1920-、東大地理学生)、連絡員として榎原康男(1919-95?、東京文理大地理学生、のち文部省初等中等教育局)の計7名。他に通信・警戒の水兵2名(小林・樋口)。本格調査時には、松山xx(191x-、農業、岐阜高等農林、戦後岐阜大学教授)、通訳に寺坂氏のち梅本氏(共に南洋興発社員)、測量班として、青島(1919-、南洋庁技手)氏ほかカナカ族測夫9名。山本連絡員(海軍筆生)、さらに、インドネシア人巡警3名、パプア族人夫120余名が付いた。

³¹ ヘールフィンク湾奥とアラフラ海の間。

³² フォーヘルコップ(鳥頭)半島に西から深く入り込むペラウ湾とヘールフィンク湾との間。ペラウ湾岸には油田が期待されていた。

³³ アルファック山の南の高地にある湖水。アンギ=ヒージ、アンギ=ヒータ(ヒージ、ヒータは姉・妹の意味とか。なお、ヒは英語読みではギ)の二つからなり、繋がっているとかいけないとか。発電資源

波多江信広朝鮮総督府技師、190x-、地質、戦後鹿児島大学教授も23日にホロナ炭田調査に出発、という状況下にあつての更なる翻弄です。反対意見も多く、そこで第二・三班の一部で組織する予察先遣隊³⁴が、管轄地域の巡察に赴き民政府総監の乗船『若鷹』(機雷敷設艦)に便乗し、不足になったパプア族苦力の追加募集(正しくは徴発)をも兼ねて、湾奥のナビレ³⁵まで情報収集に出向くことになりました。

若鷹のマヌクワリ出港は3月5日8時、途中で南洋興発の農場があるワーレンに寄り、翌6日午後ナビレ着。ところが、この駐在部隊によれば、「三班の予定ルートは通過可能なるも、二班のそれには通路無く、問題外なり。」と。なぜ、こうした情報を調査局本部で入手出来ないのか？軍に対する不信感がさらに高まりました。でも、地理屋にとってはその分、見学できる地域が増えるのですから、まんざらでも無くて。

ナビレは、砂浜に木製の棧橋が一本突き出ているだけの、急造の港。海岸から2軒ほど入ったところで、滑走路³⁶建設のための伐木・土盛り・整地作業が八分目程の進行中。コンクリート舗装は未着手で、浜辺は資材の山。工員と呼ばれる作業員数十人の宿営天幕と炊飯所があり、我々もその横に幕営しました。彼らは王子製紙からの被徴用者で、三交替、昼夜を分かたずの超重労働に疲労困憊、病人続出。現場では、パプア苦力を交えて鶴嘴・円匙(シャベルの軍用語)・畚での土方仕

としての利用価値を調べよ、の命令で、別々のコースで進む計画。3月19日出発。

³⁴ 第二班 野田・田中・佐藤・榊原、第三班 泉靖一・増満増憲(190x-、通訳、南洋興発社員)・中山稲雄(1920?-、連絡員、海軍筆生)、水兵の小林・樋口、オゴタン(192x-、インドネシア人巡警)で構成。

³⁵ ヘールフィンク湾最南端にある村。付近に大きな川は無いが海岸平野が開け、戦前から南洋興発の農場・植林地があった。

³⁶ 南北に長さ1,200m、幅5~600mの計画。帰国後の昭和十八年秋から翌年にかけて、調査報告のための会合が何度かあり、各班ごとの報告書を編集・印刷することになったが、完成したのは第六班のみで、他は印刷所の被災で原稿・原図が焼失した。また、東大生の間に「ニューギニア研究会」が生まれていて、数回の会合が持たれた。次は、これらの会合の何れかで得た伝聞。「ナビレの滑走路が完成しかけた頃、米軍機の襲撃と強行着陸で奪取された。彼らは戦車のキャタピラの何倍もある鉄の巻物(これについては後記)を投下し、即座にそれを拡げて滑走路を補強、延長した」。

ちなみに予察先遣隊には3月9日、「打電方禁止」の軍命令が下った。「ナビレ飛行場 完成マデ我方ノ企図ヲ敵ニ知ラルルヲ恐ルルヲメニシテ、之大本営ノ作戦ニ基クモノナリ、本基地ノ成ルヤ否ヤハ此方面作戦ニ決定的ナルモノナル由ナリ」と付言。

事。なぜブルドーザやショベル車、クレーン車などを使わないんだ、と、今の方には不審でしょうが、そんな土木建機は、その頃の日本にはめったに存在しなかったのです。

開闊な浜辺では蚊や羽虫も少なく、背後に雨林が迫るマヌクワリの宿舎とは別天地。何の関係か、海軟風が夜まで続き、昼の炎熱が嘘のように。然し午後が原則のスクールが、これまた数時間遅れでやって来て、しばしば雨漏りするほどの豪雨にも見舞われました。

到着翌日の夜以降、護衛兵の通信用短波無電機を借りて、日本のニュース放送(日本放送協会 JOAK 東京の「海外の皆様へ」とアメリカの対日「謀略」放送を聞きました³⁷。

幕舎には、パプア人が入れ代わり立ち代わり、バナナやタピオカ(キャサバ澱粉)持参で現れました。石鹸や煙草などが欲しいのです。そうした雑貨の輸入販売を独占していたヒーナトコ(シナ人の商店)が、戦争勃発で蜂起した原住民の襲撃・略奪・殺害などで消滅した結果、との解説でした。この交易で学んだのが、ピーサンゴリンと呼ぶバナナの天麩羅と、ピーサンスーナーなる小形で甘い品種。椰子油の香気も好ましい前者の素材は、ピーサンラジャなる大形品種の未成熟なもの。またピーサンスーナーは、ラテンアメリカでチキータと呼ぶ品種

³⁷ 調査日記からの転載。「短波で故国の放送を聞く。南太平洋で敵駆逐艦2隻を撃沈、のニュースなり。又、米国サンフランシスコよりの日本語放送に聞き入る。デマ放送の前に、盛んにドイツに対する空襲の猛威を説き、日本に対しても同様の、より以上の空襲が加えられるであろう、と嘯き、最後に、ルーズベルトはこう言った、という。彼の迷言に曰く、「日本への道は幾通りもある」と、次に音楽の後、「未だ天皇陛下に忠良なる日本臣民に告げる。本日は、日本軍閥が愚かにも見込なき戦争を開始してより二千二百日目である。この戦争に於いて最近一週間に日本国民が払った犠牲は次のようである」と題して、ソロモン、ニューギニア etc.のデマ放送を行う。曰く、ビスマルク群島方面で二等巡洋艦3、駆逐艦7、輸送船12、飛行機180、兵員1.5万プラス5千。彼の損害、飛行機4、と、全く噴飯物なり。その他、ラエに対する爆撃、独ソ戦 etc.あり。雑音多し。」

翌八日、大詔奉戴日には、「モスコ(モスクワ放送)が入る。しきりと、ドイツの野望と他国はその犠牲になりつゝあると宣伝しつゝあり、語調、激越なる日本語。日本のニュースあり。大本営発表八日午前五時。二月十六日より三月五日迄のソロモン・ビスマルク群島方面の戦果と損害。一つ、敵機124撃墜破、潜水艦4沈没。一つ、我が損害、駆逐艦2、輸送船5、飛行機7。これは昨夜の敵デマ放送の実相であろう。飛行機の損害に於いて、正に正反対である。此の輸送船団は、我々のパラオ滞留当時出港した船団には非ずやと心配なり。」(パラオの主島コロールで、炎熱下に完全装備、埠頭から南洋神社までの、約2軒の道を速歩行進させられている歩兵部隊を見た。落伍者多数。実戦を目前に、何と無意味な消耗か、と呆れ果てたものである。)

の仲間であったようです³⁸。

苦力募集に行った人々が聞いた「燃える沼」の噂で、近くに「油兆地」があるらしい、との話。メタンだろうが、ともかく、と、野田・佐藤・中山の3名で調査に行くことになりました。残余は、三班の人はその基地へ、二班はマヌクワリへ帰還。一方、我々を「油兆地」近くまで運んでくれる筈の駐在部隊の大発が、二日間ノ修理ヲ要ス、とのことで、予定変更。付近のカンボン(村)巡りを試みました³⁹。2日経っても、大発は修理未了。やむなくブラウ(丸木舟、ミクロネシアでのカヌー)を借り上げて往復することとし、浮木が両側に付いた大形ブラウを調達。カパラカンボン(村長)以下5人の漕手で乗り出たのですが、まじめに漕ぐのは村長ひとり。日本人にはインドネシア人巡警ほどの権威も無いらしく、他はまるで船遊び。或いは、部隊の担当主計が、賃金を先払いしていたのかも知れません。3時間ほど経ち尻が痛くなった頃、岸のニッパ椰子の蔭から小舟が出て来ました。漕ぎ手は中年と白髪の女二人。老女は目的地カンボンキミの女村長だそうで、これも厳しく立派な顔立ちでした。ナビレに行く予定を、我々の先導に変更して三角州の小河口に導入。ここで上陸しましたが、さらに1時間ほど歩き回っても、石油は愚かメタン発生地も確認出来ず。復路は、パプアにも帰心。往路の半分にも満たない時間で帰着しました。隊員3人は、ブラウの経験もしたし、と、これまた取り敢えずの満足。翌日、迎えのダイバーボート第三光洋丸に移り、寄港々々の3日掛かりで帰還。何のための先遣隊だったのか、まことに意義不明ながら、個人的には人類地理学的観察が収穫!でした。

第二班・ブラウ上流域調査

マヌクワリの本隊では、荷物梱包の作り直しで大童。

³⁸ マレー語でゴリンは揚げ物、スースーは乳、ラジャは王様。

³⁹ 日記抄:「…トロンガレ=カンボン…娘達はパプアに珍しくまともな顔立ちにして、着物(和服)を着せ、色を少し白くしたら、日本にも多数に見られる女と成るだろう、と、皆の見解一致。(他村にはアリアン人的顔立ちの者もいて、混血の系統であるらしい)…パプア数人、珊瑚の新鮮なるを大切に持ち来るを見、何に用ふるやを問えば、所持の石灰粉を示す。即ちピンラウ、或種の植物樹皮と共に(ピンロウ[檳榔樹]の実とキンマ[胡椒科の植物]の葉)噛む生石灰粉の原料なり。」

真っ赤な唇になるが、一種清涼な気分が味わえる由で、この風習は、熱帯アジアからミクロネシアまで広く分布する。アンデス高地のインディオにも、コカの葉を石灰粉と共に噛んで清涼裡に天界に遊ぶ風習があり、石灰は塩湖の堆積物から得られていた。

ポーターの担送力 20Kg に合わせての、箱や袋の詰め替え作業です。そして19日には第四・第一班が相次いで出発。23日、第五班出発。そして出遅れた第二班も、ようやく25日出発の運びになりました。

第一根拠地(一根)設定予定のアンダイ村アルファイまでは、はっきりした陸路があると云うのに、なぜか海路で。百余名の苦力を舳に乗せましたが、大半がアルファク族と呼ばれる山の民なので、波を怖がることひとしお。これを班員乗船のダイバーボートが牽引する仕組みで、局長の式辞で壮行式を行った棧橋を離れたと思ったら、僅か1時間でもう目的地の沖。荷物と苦力の積み降ろし分だけ、余計な手間と時間が掛かりました。ここで、海浜林を伐採して一根の建設。日本人用天幕3張、カナカ測夫+巡警用のヤシの葉葺き家屋、それに倉庫もです。家や倉では、葉っぱ付きの枝が壁代わり。

地質・鉱物班と測量隊は、翌日から調査を兼ねて二根建設地を求めて密林の奥へ進む。やがて、ほぼ半日行程のブラウフィ川の岸に、二根を設定しました。29日に移動。上流・支流の沿岸など、付近を数日調査して、やはり半日行程ほど上流の砂礫段丘の縁に三根を設置したのが15日。割山と名付けた崩壊地の上流に設けた四根には23日に移動。もう4月半ばにもなりましたが、山麓の丘陵地帯を抜けられず、カナカやパプアの病人も増えています。そこで、作戦会議。班の全員が移動する根拠地方式では、期間内の使命完了は不可能。食糧も乏しくなった。此処から以南は、地鉱の四人を含む邦人7と護衛兵2、巡警1、苦力28名の小部隊で強行迅速調査を行い、格好だけは付けたい、の結論。そして29日、天長の佳節を機に出発。

その後は本格的な山道で、有るか無しかの踏分道にも急坂が連続。バロメーター高度計での測定ながら、高さは1,000mを越え、樹林も着生植物の多い霧林に変わりました。それと共に、丘の尾根や頂に散居する人家が見えだし、シダ類やイネ科の雑草だらけの畑にも、彼らがジャグントンと呼ぶ玉蜀黍が植わっています。また、バビウータン(猪または野生化した豚)避けの柵の中には、ウビ、ケラディ(共にタロ[里芋]の仲間)とカボチャやタバコ。家のそばには、バナナや小粒トマトにトウガラシまで。焼畑の跡地らしい疎林もここかしこに見えます。やっと、マネキオン族の本拠に辿りついたのです。

さらに千五百米前後の峠を二つほど越えたマイボリ河畔で宿営。カナカ式の木枝小屋に草とグランドシートを敷き、屋根にはゴムシート。昼は 20 未満で爽快ですが、夜は、吐く息が白く見えるほど冷えしました。裸同然の苦力には応えるらしく、翌日は、病気と云うもの 8 名を帰らせ、残り 20 名の精鋭で出発。やはり起伏に乏しい二千米前後の尾根を通り、峠の上り下りで谷を横切りまたは源流を迂回して、ミニャンポー村着。付近には、畑と云うよりも農場が多く、オレンジ・パイヤまでありました。オランダ時代の開拓地でしょう。新苦力 13 名を獲得し、カナカ式設営にも慣れました。この村の高度は千五百米程度。

5 月 1 日。5 時の気温 15.5、7 時 40 分には 18。ここからも前日と同じ地形、同じ景観の中を進み、また千米前後まで下り、竹林の中をかなり広い濁流の大川を渡って、さらに数百米の急坂。やっと目的のチョイシー村。ここは尾根上の小起伏地で、小学校があり、壁は木の皮、屋根も椰子類の葉で葺いてありましたが、椅子には藁？のクッションが付いていました。ここでは村民が三色旗で迎えてくれたのですが、野田氏が三本に引き裂き、代わりに日章旗を御下賜。彼らは大喜びで、布片を三色とりどりの褌に転用したのです。

村からさらに、南方の展望が利く峠に案内？され、「峠の茶屋」的な人家で昼食。食後、霧(下界から見れば雲)に妨げられながらも、遙か南の尾根を観察しました。東から、ヘールフィンク湾の船上から眺めたときも、山地の著しい平頂・定高性を訝しんだのですが、北側から見ても、やはり起伏の殆ど無い平尾根です。面白いことに、近くの尾根に一条の大きな滝が懸かっています。尾根筋を川が流れる筈もなく、かなり広い高原

たぶん、隆起準平原面が残っているのでしょう。結果的に第一・四班の報告書は目に出来ませんでした。アンギ湖の存在と成因も、そんなところにあるのでは、と思います。然しそこまでの間には、幾筋もの山波があり、二日や三日で到達出来る場所では無さそう。南進はここで打ち切り。この峠を泣別峠と命名することに合議一決。この間に高度計の針も、1930 米から 1915 米に低下していました。

この日は、昨夜のカナカ小屋へ戻って泊まり、翌 2 日は、海拔千五百米前後のインダイ村を経ての帰り道。インダイでは村長の家を覗き、平面図を作成。その夜は、

往路のマイボリ宿営地を利用。以後は一瀉千里の速さ。3 日に四根跡を通過し、4 日、三根では測量班ブレッツ一君の墓に詣でました。私らの留守中に、悪性マラリアで病没、殉職したのです。ここで、遺骨・病人と共にマヌクワリに赴いた田中医師を除く本隊と合流。休養と付近の補充調査その他に数日を過ごした後、二根跡の森林を横目に、本流筋をひたすら北上。12 日には、山も河岸段丘も遠くに去って著しく幅を増したブラフィの河原、と云うよりは、野生の蜜蜂が盛んに飛び交うスキ原に五根。翌日もその下流に六根。さらに支流(分流?)のメイスヴォキ川の岸に移って七根、そこからは、ネグリ=スンピラン(九匹の蛇)と呼ばれる迷路のような丘を越えて、タコの木(パンダヌス)茂る海辺の村、プフォールに出る。この丘は、軟弱な泥岩・砂岩が開析された台地で、前身は恐らく、古ブラフィ川のデルタ堆積物。マヌクワリ付近の珊瑚礁段丘に対比されるものでしょう。

15 日はプフォール海岸で最後のキャンプ。あとは明日の、本部からの迎いのポートを待つばかりです。砂浜にシートを敷き、カナカ測夫が採ってきた海亀の卵などを肴に、隊員は残りのアルコール全部を処理する酒宴。茹卵の殻がなぜ固くないの？などと管を巻く先生も現れる始末。パプア苦力にも、賃金に加えて残飯ならぬ残米の配給。輸送陣とは此処でお別れです。辛い仕事から解放され、ボーナスまで貰った彼らは、砂丘に輪を描いてライン、いやサークル=ダンスを披露。今まで 何処にしまっていたのか、頭には極楽鳥の羽根飾りまで付けて。唄いつつの踊りを、夜が更けるまで続けるのです。

日本人隊員も、マヌクワリがすでに焼野原と化していた、とは、つゆ知らずに…。

(この項 おわり)